増補新版日本文学史 中古

責任編集／久松潜一　編集／池田亀鑑／秋山虔

増補新版 日本文学史 総説 年表

久松潛一
五味智英
池田亀鑑
秋山虔
市古貞次
麻生磯次
吉田精一

増補新版日本文学史　総説　年表

昭和52年4月23日発行　久松潜一編　発行所　至文堂

東京都新宿区払方町27　東京（260）2211（代）　発行者　佐藤泰三

印刷　誠之印刷株式会社　製本　凸版印刷

序

文学史の研究は、文学研究における到達点であり、これによって全体と有機的に統一づけることができる。日本文学の研究においても、明治以後はそれ以前の注釈を中心としたと異なって、文学史研究が中心的位置を占めてきたが、なお今後にまつところが多い。私自らも日本文学史の研究を一つの課題として多年考察を続けており、これに関する一、二の述作をまとめたことがあるが、個人の研究には限界がある。ことに規模の大きい文学史においては、それぞれの時代の専門分野にわかれてくるので、共同的に扱うことが必要となるのである。

こういう考えのもとに同学とともに先年規模の大きい日本文学史を企画し、各時代文学史をそれぞれ専門とされている方々にこうて執筆していただいた。全体を一つの史観によって貫くというよりも、それぞれの分野における最も正確な叙述によって文学史の基礎をしっかり立てることが目標であった。そして、多数の人が書いた場合に、相互に有機的な連絡がなく統一のなくなることのないために、私のほかに五味智英・池田亀鑑・市古貞次・麻生磯次・吉田精一の五氏がそれぞれ専門とする時代を分担されて、執筆者とも十分打ち合わせをし、各項が講座風な配列と叙述に終らないように有機的な調整をした。そして、執筆者の深い協力と編集の五氏の献身的な努力とによって、立派な内容の上に全体に統一のとれた文学史となることができたのである。

それから一〇年が過ぎた時、顧みると文学史上の新資料・新見解の現れた点も多く、学界の水準を示すためには増補訂正をなすべき点も生じてきたので、執筆された方々に再びこうて増補訂正を行い、新しく発表された参考文献をも加えた。近代編ではその後の文学的事象を書き加えていただき、年表も数年間の記事を補った。したがって索引を

新たに作成し、口絵写真なども新しくした。ただこの間に、執筆者のうちで池田亀鑑・風巻景次郎・西下経一・秋本吉郎・田辺幸雄・吉原敏雄・佐佐木治綱・杉浦正一郎・宇佐美喜三八・片岡良一氏らが世を去られた。そのために中古編の編集に秋山虔氏を委嘱するとともに、各項目についてもそれぞれ新しく執筆者を依頼して増補訂正を行った。かくして面目を一新した日本文学史六巻が完成したのは昭和三十九年のころであった。

それからさらに、五、六年は過ぎたが、増補訂正版では、増補した部が本文とは別々になっているので、使用の上でも体裁の上でも不便なことが少なくなかった。そこでこのたびは執筆者にこうて増補の部分をも本文に組み入れ、また全面的に書きかえたりして、新版として世に送ることになった。近世・近代はもともと量も多かった上に、近代では書き加える部分も多く、一層量も大きくなったので二冊にわけることにした。また総説年表編の年表も書き加えられ、量も多くなるので、年表編と総説編を別々にすることにした。

このたびの新版では、参考文献をまとめて後に加えることにした。その他、歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに改めた。ただ引用文はもとのままである。

日本文学史の研究は、今後も進展してやまない。本書にしても、文学史の一つの段階を表すものではあろうが、これによって日本文学史研究の現在における大きな礎石としての役割を果すことはできるであろう。

終りに、この日本文学史のためにそれぞれすぐれた研究成果にもとづいて執筆され、再三にわたって増補もしくは書き改めて下さった方々の協力を心から感謝する。ただ増補訂正版からこのたびの新訂版に至る間に窪田敏夫・田崎治泰氏らが世を去られたためもあって新しく執筆を中西進・犬養廉・島田良二・福田秀一・長谷川強・恩田逸夫・片岡懋氏らに委嘱した。片桐顕智氏は書き改めを完成されたのちに世を去られた。この日本文学史の形成と発展にも、種々の世の移り変りが現れていることを今更に感ずるのである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

さらにまた、この文学史をよりよくするために不断に協力を惜しまれなかった佐藤正叟氏も世を去られて、新たに佐藤泰三氏によってことが進められたことを付記して、感謝の意を表したい。

昭和四十六年四月

久松潜一

このたび増補新版を世に送るに当って、学界の進展にともなう若干の増補訂正を行い、年表も昭和五十年までの事項を追補した。また年表編と総説編とを再び一冊にまとめることにした。またその間に喜多義勇・小林智昭・藤川忠治・成瀬正勝・広田栄太郎諸氏が世を去られたのは感慨の深いものがある。

昭和五十年八月

久松潜一

総

説

凡　例

一、本書は「増補新版日本文学史」の総説をなしている。

一、総説は日本文学史に関する基礎的問題として史的区分、特に各時代の範囲ならびに境をどこにおくかについてのべるとともに、日本文学思潮の中心をなす美の歴史的類型の考察を行っている。上代・中古・中世・近世・近代にわけて各時代の美の類型の考察を行った。

一、新版では第六章「文学評論史と文学史との間」を増補した。

目次

第一章　日本文学史の基礎的問題……一
一　日本文学史における「古代」の概念……一
1　文学史の区分……一
2　文学史における古代……三
二　古代と中世との境……五
1　中世の範囲……五
2　中世的なるもの……七
3　中世の文学思潮……一〇
4　文学形態における中世的なるもの……一四
三　中世と近世との境……一八
1　中世と近世……一八
2　近世的なるもの……一九
3　安土桃山期と上方文学……二一
四　近世と近代との境……二一
1　近世と近代……二一

2　近代と現代……三
第二章　古代文学における美の類型……二四
一　序……二四
二　清と明と直……二五
三　「あはれ」の美とその系列……二六
四　「をかし」の美とその系列……四二
五　「たけ高し」の美とその系列……五三
第三章　中世文学における美の類型……六四
一　序……六四
二　幽玄の意義とその展開……六五
三　有心の意義とその展開……七九
四　無心の意義とその展開……九一
第四章　近世文学における美の類型……九八
一　序……九八
二　滑稽美と庶民性……一〇〇
三　「さび」「わび」「軽み」と庶民性……一〇五

四　「粋」「通」「いき」と庶民性……一二八
五　結　び……一二四
第五章　近代文学における美の類型……一二五
一　近代における写実美……一二五
二　近代における浪漫美と古典美……一二六
第六章　文学評論史と文学史との間……一二九
一　文学史と文学評論史との関係……一二九
二　「土佐日記」の紀行文学性と歌論性……一三〇
三　「枕草子」の美意識と文学性……一三三
四　藤原定家の歌論と和歌との関係……一三八
五　芭蕉の俳論と作品との関係……一四四
六　近代における文学評論と文学との関係……一四七
索　引……一五〇

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第一章　日本文学史の基礎的問題

一　日本文学史における「古代」の概念

1　文学史の区分

日本文学史における古代というのはいつの時代をさすのであろうか。これには文学史の区分ということが起ってくるのであり、また古という概念を考えてみる必要がある。文学史の区分は種々の態度がある。政治史による区分や地理的区分や文学作家による区分、文学流派による区分、文学形態による区分、文学思潮による区分や、文学動機による区分等があげられる。これらのうち、政治史による区分としては律令制時代や封建制時代等による区分もそれであり、地理的区分としては大和時代・平安時代・鎌倉室町時代・江戸時代のように遷都や幕府の所在地による区分がある。しかし都といい、幕府の所在地といい、地理的性質もあるが、一面において政治の中心地の異同という点で政治史的な点もある。その点で具体的でもあるので土地を中心とした区分は日本文学史の成立以来、比較的多く用いられている。

このような土地を中心とする文学史の区分とならんで用いられている区分に、純粋に時間を中心とする区分がある。古代・中世・近世・近代などという区分である。こういう区分は明治時代における文学史の草創というべき明治二十三年になった三上氏らの日本文学史が土地中心の区分をとったのに対して、同年に出た芳賀氏らの国文学読本は上古・中古・近古・近世・現代という区分を用いている。それは明治三十年代になった国文学史十講にしても同様で

ある。純粋時間による区分は世界各国の文学史との関連のもとにとりあげることができるのでしだいに広く行われつつある。これは文学史を文化史や一般歴史との関連において扱うにも都合のよい区分である。ただこれは純粋時間的であるだけに具体的にどの時代をさすかということが定めがたい場合があり、史観によって、日本文学史にしてもその含む時期の範囲が同一でないのである。本来このような時間による区分の基礎は古と今との区別にある。古代と現代という二つの区分がまず意識される。観念的には過去と現在と未来という三区分が立てられるけれども、未来は予想であって実現されていない。そこに文学史としては古と今とがあって未来は可能性においてのみ存する。これは国語においても古代語と現代語とにわかつことに基礎がある。

しかしこのような二つの区分だけでは十分に展開の姿を説明されがたいところから、更に中世を加えることによって古代・中世・現代の三区分となり、更に近代を加えることによって古代・中世・近世・現代の四期区分となる。また近世と現代との間に近代もしくは最近世を加えることによって五期区分ともなる。上代と中世との間に中古をおくことによって六期区分とすることもできる。このうち、上代・中世・現代という三期区分は二条良基や宗祇の連歌史の区分にもみられるところであり（両者によって範囲は異なるが）近世の富士谷成章、御杖は和歌六運弁においてそれまでの和歌を六期にわけているが、名称からいうと「上つ世」「中昔」「なかごろ」「近むかし」「をとつ世」「今の世」となる。これは上代・中古・中世・近世・近代・現代という史的区分の名称にも置きかえることができる。そうすると今日用いられている一つの史的区分の立場に等しくなる。上古・中古・近古は上代・中古・中世という名称として現在は多く用いられている。

史的区分をこのようにみてきた上で古代というのは、日本文学史でどの範囲をさすかという点になると種々の考え方がなされる。もし二期区分とすれば現代を除いたすべてを古代とすることができる。日本文学を古典文学と現代文

学という二つに分ける場合の古典文学は、古代文学と現代文学とにわけた場合の古代文学に相当する。そうすると江戸文学もしくは明治文学までも含むことになる。しかしこのような範囲は今日における日本文学史の区分としてはあまりに広すぎるのである。それで古代・中世・現代等にわける場合の古代は、中世以前ということになる。この場合は中世をどの範囲にみるかによって異なってくる。最近では江戸時代も封建制時代であるから中世であるという見方が現れているし、一方では平安時代から中世とする見方もあり、万葉時代をも中世とする見方がある。このように中世の範囲において種々の見方が存するので、したがって古代の範囲も一定しないのである。そうして上古・中古・近古・近世という区分の名称では近世以前が古代であるとすることになる。そうすると近世以前はすべて古代であるとすることもでき、具体的にいうと室町時代までを古代とすることになる。

このようにして史的区分の立場によって、現代以前を古代とする見方、近世以前を古代とする見方、中世以前を古代とする見方が存することになる。それとともに日本歴史の区分の上で上世・中世・近世・最近世・現代という区分をたて、上世もしくは上代の前に古代を立てる見方がある。いわば原始時代・古代・上世（上代）というように区分するのである。この場合の古代は文献成立以前であり、奈良時代以前を古代としているようにみられる。古代の含まれる範囲は諸説によって相違している。いずれにもそれぞれ理由はあるが、日本文学史としてはどのように古代の範囲を定めるのが最も適当であろうか。

2　文学史における古代

文学史は一般の歴史に比較すると文献の成立ということが大きな意味を有している。伝誦された時代の文学も存するけれども、なおそれにしても古代においては記紀歌謡のように古事記・日本書紀という文献となったものによって伝来されているのである。こういう点で一般歴史より古代においては年代が下って成立しているともみられるし、少

なくとも時期区分においては上世の前に原始時代や古代をたてる必要はなかったといってよい。それで日本文学史において上代の前に古代をたてることは必要がないし、また行われてもいない。それで古代という場合は文学史では上代と中古とを含めていうか、もしくは近古までを含めてさすかいずれかになる。すなわち中世以前を古代というか、近世以前を古代というかのいずれかであるが、現在において考えると中世をたてるのは普通に行われているから、中世以前を古代とするのが適当であると考えられる。またここで課せられた古代の意味も中世以前をさすとみるべきであろう。

したがってこの場合にも中世の範囲をどこにおくかによって種々の場合が考えられることは前に記したところである。中世を鎌倉時代以後におく見方によって大和時代と平安時代とを古代とする立場、平安時代をも中世とすることによって大和時代を古代とする立場とがあり、両者とも今日用いられている。平安時代と鎌倉室町時代とは共通する点もありその境をどこにおくかは容易に決しがたい。

ことに表記法からいうと大和時代までは漢字専用時代であったのに比して平安時代以降は片仮名・平仮名の用いられることによって、それ以後は共通する点が多い。そういう点から平安時代と鎌倉室町時代とをあわせて中世とすることは一理あるが、しかし武士が起り鎌倉幕府の開かれることによって成立した封建制時代という点からすれば、ここに平安時代と区別される。貴族政治であり貴族文学であるという点からいえば、大和時代と平安時代とはむしろ近いのである。また抒情的という点から見ても近い関係にある。それで私としては日本文学史上の古代としては平安時代をば中世と区別して、平安時代をも含めてそれ以前を古代文学とすることがより適当であると考える。もとより平安時代を中世の中に入れることを全く否定するのではないが、しかしいずれかといえば古代に加えたいのである。

そうしてその場合に古代と中世との境をどこにおくかについては次の項に考察したいが、結論的にいえば保元（ほうげん）の乱

の起った保元元年（一一五六）を古代と中世との境におきたいと考える。

このように範囲を定めた古代における文学はどのようであったかを叙述するのは、ここでは略する。ただこれを大きく二つにわけて、大和時代と平安時代とにわけてみられる。またこれを上代と中古とにわけてみることもできる。本書ではその立場に従っている。そしてこの二つの時代を統一するものとしては津田氏の「文学に現はれたる我が国民思想の研究」におけるように貴族文学の時代とすることもできるし、尾上氏の「日本文学新史」におけるように情中心の文学時代とすることもできる。あるいはこれを叙事文学から抒情文学への時代ともいえるし、抒情文学の時代ともいえる。それを区別していく点からいえば大きく二つにわけられるとともに、更にこれを細分することもできる。しかしどのようにわけてもはっきりとわけてしまうことはできない。生きた文学史は常に持続的であり、連続的である。その間に血液が通っている。それは精神のつながりでもあり、文学の上では様式の上のつながりともなっている。

二　古代と中世との境

1　中世の範囲

日本文学史において、古代と中世との境をどこに置いたらよいかということは、日本文学史を扱う上に一つの課題となる。それは中世のはじめをどこに置くかという点とともに、中世の終りをどこに置くかという点にも関連してくる。中世の範囲については現在の学界においても種々の見解にわかれている。いずれの範囲と定めるにしても、それとしての意義はあるであろう。ただ文学史の史的区分は全体としての統一がなければならないし、また史的区分の基準が立てられていなければならない。それとともに史的区分は歴史の進展とともに動いていくもので固定してはいない。大和時代・平安時代・鎌倉時代などの都または幕府の所在地の変遷によって行う区分などと異なって、純粋時間

による区分は時代の進展につれて動いていくのである。

すでに述べたごとく時間による区分は古と今ということが区分の基礎をなしている。古代と現代ということが中心となって、文学においても古の文学と今の文学ということになる。古今集という名称も古と今との二つを表している。平安時代の末ごろまでは和歌を考えるにも古代と現代という二つの区分によって表されるのである。しかし歴史的変遷に対する意識が進むにつれて古と今とだけでは全体を包むことができないので、古と今との間に中を置いて古代・中世・現代という三期区分が生ずる。二条良基が筑波問答において良基までの連歌を上古体・中古体・近来体にわけ、宗祇が宗祇までの連歌を上古・中古・当世にわけたのも、この三期区分に従ったのである。ただしその範囲になると良基は平安時代の連歌を古代、鎌倉時代の連歌を中世、良基時代の連歌を当世といっているに対して、宗祇は鎌倉時代までの連歌を古代、良基時代の連歌を中世、宗祇時代の連歌を当世というのであって、その範囲は異なっている。中世といっても相違があるのである。古代・中世・現代という三期区分は、更に近世が中世のつぎに加わって四期区分となり、また近世と現代との間に近代（もしくは最近世）が加わって五期区分ともなる。また古代といってもこれを上古・中古・近古にわけることが行われており、近古を中世にあてる場合には古代を上古・中古の二つにわけることも行われている。このようにして時期区分は細かくなっていくのである。

近世になって富士谷御杖は和歌六運弁においてそれまでの和歌の展開を六期にわけて「上つ世」「中昔」「中ごろ」「近むかし」「をとつ世」「今の世」にわけているのは、その含まれている範囲は別として六期区分として注意されるし、これを上代・中古・中世・近世・近代・現代という名称に置きかえてみることができる。「中ごろ」は中世に当るのであるが御杖による「中ごろ」は後拾遺集から金葉・詞花集の時代である。このように中世といってもその範囲はしだいに変化していくのである。それは今の世が刻々と変っていくので自然にそのようになるのである。その上に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com